

木材情報

—木材の需給・価格、生産、流通、
加工・利用、輸出入等に関する総合情報誌—

2025大阪・関西万博における木材活用.....1	三宅 英隆(一般社団法人大阪府木材連合会 専務理事)
森林浴から日本の森林の価値を探る —森林空間利用の具体的な取り組みと展望—.....6	小野 なぎさ(一般社団法人森と未来 代表理事)
技能検定試験(林業職種)の始動.....10	西 真(一般社団法人林業技能向上センター 事務局)
2024年日米加JAS技術委員会及び建築専門家委員会の報告.....14	福田 淳(林野庁木材産業課長)
保存処理木材の現状と将来 その2 難燃薬剤による処理木材の環境影響評価について.....19	中村 昇(岡山大学グリーンイノベーションセンター 特任教授)
ルポ 岐阜県高山市で地域材ミーティング 「森から考える」ものづくりの担い手が交流.....24	赤堀 楠雄(林材ライター)
木材価格・需給動向.....28	
国産原木市況.....30	
合板市況.....31	
データ.....32	

「森から考える」ものづくりの担い手が交流

飛騨、旭川、新潟、静岡の取り組みを発表

赤堀 楠雄（林材ライター）

全国各地で地域材の家具・木工品づくりに取り組んでいる実務者たちが「地域材ミーティング」という催しを10月21日に岐阜県高山市で開催した。飛騨木工連合会が主催する恒例の一大イベント「2024飛騨の家具フェスティバル」会期中（10月19～23日）のことで、同フェスティバルから飛び出し、地域材の可能性を語り合い、連携の道を探ろうというのが趣旨。約50名が参加した。

実務者4名が地域材活用の取り組みを発表

企画したのは高山市の家具工房・木と暮らしの制作所の松原千明さん。隣の飛騨市で広葉樹活用コンシェルジュとして活動している及川幹さんも協力した。及川さんは同市が進めている広葉樹のまちづくり事業の中心メンバーのひとり。双方の人脈を駆使して参加者を集め、当日のコンテンツを練り上げた。

ミーティングは4名の登壇者による事例発表と参加者全員によるフリートーキングの二部構成。登壇したのは、及川さんのほか、北海道東川町の鳥羽山聡さん（木と暮らしの工房代表）、新潟市の中川雅之さん（ISANA）、静岡市の繁田浩嗣さん（玉川きこり社社長）。及川さんは広葉樹のまちづくり事業について



左から松原千明さん、繁田浩嗣さん、鳥羽山聡さん、中川雅之さん、及川幹さん。それぞれの発表が終わったところでの1枚。この後のフリートーキングは、参加者全員が持ち寄った各地の地酒（持参することが参加要件になっていた）が酌み交わされ、大いに盛り上がった

説明し、鳥羽山さん、中川さん、繁田さんはそれぞれの地域材である北海道産白樺、新潟県産広葉樹、静岡県産広葉樹を活用する取り組みについて発表した。概要は次の通り。

■飛騨市広葉樹のまちづくり・及川幹氏

工業的流通から抜け落ちたものを拾いたい

2020年に広葉樹の仕事をやりたいたいと思って飛騨市にきた。地域おこし協力隊として活動しながら今年4月に製材所（やまかわ製材舎）を起業した。製材のほかに流通業やコーディネート業も展開していく。

企業理念は「木の文化の落ち穂を拾う」。わかりにくいなと自分でも思うが、今の工業的な流通からは、その土地でどういう営みがあったのかという地域性や風土性とでも言うべきものが抜け落ちている。そういうものを流通に乗せてみなさんに届けたい。他地域の材でも、同じような思い、同じような価値で流通しているものは、当社で仕入れて販売していきたい。

地域材には工業的に測りやすいグレードからはみ出してしまうピーキーなもの（※限定的な範囲でしか性能を発揮できないもの）がたくさんある。そういう素材を需要側とどう出会うかがポイントであり、飛騨市では、製材所が隣接する中間土場の運営に力を入れて

いる。来年度からは自分の後任になる地域おこし協力隊員をここに配置し、(任期の)3年間かけて仕組みづくりを進めたいと思っている。

天然更新の状況を公表する

飛騨市では、小規模皆伐による天然更新に取り組んでいて、生産性と更新を両立させるための施業方針を策定した。

天然更新の場合、伐採後、5年以内に更新が完了していることを確認しなければならないと森林法で定められているが、飛騨市では更新状況をオープンにすることにした。これはユーザーの方々が一番知りたいことなのではないか。

地域の人間は、伐った森がどうなったのかを簡単に確認できるが、地域外の方々がそこにタッチすることは難しい。森の経過が見られるのは本当にぜいたくなことで、伐るのは一瞬だが、そのあとに森がすくすくと育っていくプロセスがある。産地にいない作り手の方もそれを知ることができれば面白いだろう。

眺めがいのある木を集め「眺木展」

今までは産業を何とかしなければとあわただしくして遊んでいる暇はないという感じだった。しかし、最近では、ちょっと遊びもできるようになり、眺木展という催しを2021年と2023年に開催した。眺めがいのある木を集めてお寺の縁側に展示し、地域の方々に無料で楽しんでもらうというものだ。

かなりマニアックな企画だが、そういう方がほかの地域にもいて、大阪や名古屋、山形などでもやってくれた。産業の枠組みではできないこと。来年の3月に飛騨市で第3回を開催する予定だ。

われわれは「広葉樹のまちづくり」というテーマを掲げているので、いくらお金が集まるかだけでなく、どうやって町の人たちに関心を持ってもらえるかを重視している。広葉樹を町の景色として定着させることを意識し

ながら取り組みを進めている。

■白樺プロジェクト・鳥羽山聡氏

天然更新で自立できる林業を目指す

一般社団法人白樺プロジェクトは5年前に発足した。研究、家具、グラフィック、建築、建材、森林などさまざまな分野の有志が参加している。「森から始まる」を合言葉とし、北海道の白樺に特化した取り組みを進めている。白樺を北海道の持続可能な地域資源として捉え、産業として、さらには文化として地域に根付かせることが目的だ。

白樺は、世界の森林面積の3分の1を占める北方林の重要樹種だ。白樺をはじめとするカンバ類は寒冷な場所に生息できる広葉樹で、北方林を持つ国々では古くからさまざまに利用されてきた。

北海道の白樺はこれまであまり利用されてこなかったが、道立林産試験場の研究によって木材として十分使えることがわかっている。幹だけでなく、枝や葉、樹皮、樹液も利用できる可能性があり、林業に収益をもたらすことが期待できる。

白樺には育てやすいという特徴もある。伐採跡地で最初に生えてくるバイオニアツリーなので天然更新がしやすい。低コストで自立できる林業ができるかもしれない。「ここに生えなさい」ではなく、「ここに生えたい木」を利用する。北海道のイメージを彷彿とさせる木なので、さまざまな産業文化に広がる可能性がある。

北方林を再生させるきっかけに

「広葉樹大国」だと言われ、「森林資源は無尽蔵」だとも言われた北海道だが、森の様子は昔とは大きく変わってきている。第二次世界大戦後には天然林を伐採し、針葉樹のトドマツやカラマツが大量に植林された。太くて良質な広葉樹は激減している。

パイオニアツリーである白樺を循環利用できれば、奥地林まで開発の手を伸ばさずに済むかもしれない。それによって、もともとあったような原始的な北方型のいい森を回復させたい。

そのためにも白樺を使い続けることと育てることとの両輪の活動をしていきたい。北海道大学の研究林では、カンパ類の天然更新が40年以上前から研究されていて、この先さらに50年かけて白樺の大径化・高品質化を目指す研究がスタートする。

そうした機運を高めて白樺の施業地を増やすためにも、50年後にも高い付加価値を伴って使われるための仕組みづくりを今から目指していく。

人を育てて技術を受け渡していく

自分が代表を務めている木と暮らしの工房は2002年に創業した。新しい家具をつくるだけでなく、お客様が愛用している家具を長く使うためのお手伝いにも力を入れ、家具再生ということをやっている。

スタッフは7名で1級技能士が4名いる。工房の経営は人材育成のためにやっているという気持ちが半分くらいある。例えば、旭川には木地加工の職人があまりいないので、そういう人を育てて独立させるということをやっている。

手仕事というのは誰かから教えてもらった技術であり、それを次の人に受け渡していくことが大切だと考えている。

■モリーゴーランド・中川雅之氏

森と街を「GO-ROUND」(循環)させたい

「モリーゴーランド」(MORRY-GO-ROUND)は、新潟県産広葉樹を活かしながら森と街の循環をつくろうという取り組みだ。僕たち家具職人だけでなく、木版画家、染色家、ワインソムリエ、コーヒーパリスト、イラスト

レーター、アイスクリーム屋、料理研究家、デザイナー、写真家とさまざまな職能を持った20代後半から40代の仲間たちが集まり、2023年4月にスタートした。メリーゴーランド(MERRY-GO-ROUND)の「E」を「O」に変えると、モリー(森)がゴーラウンド(循環)するというダジャレで名付けた。

県産ブナ材プロジェクトとの出会いが契機

取り組みをスタートしたきっかけは、5年ほど前に「スノーピーチプロジェクト」の人たちと出会ったことだ。

2015年にスタートしたスノーピーチプロジェクトの目的は「豪雪山間地域の若いブナ林を成熟した森に育て、その過程で出てくる優良間伐材を活かすこと。そして、ブナ林を育てている山間地集落を守ること」(プロジェクト世話役である新潟大学名誉教授・紙谷智彦氏の言葉)だ。

それまでは外国産の材料ばかりを使っていたが、この森から伸ばされた手に応えられるように、川下の街からも手を伸ばしたいという思いが湧きおこった。

だが、ひとつの家具工房だけでは消費量が少なく、山間集落や山に関わる人たちの現実がどうなるものでもない。同業者の0.1の需要を集めて1の需要にしないといけない、そのために同業の垣根を超えるべきだと思った。

ただし、ブナ材には節が多く、反りや割れも発生しがちで、間伐材であるため量的にもばらつきがある。製材の規格も必ずしもニーズと一致しない。これでは作り手にとってリスクが大きいため、スノーピーチに限定せず、県産広葉樹という窓口で仲間を募ることにして、モリーゴーランドを立ち上げた。

県産広葉樹を当たり前の選択肢にしたい

家具工房がまとまれば、川上川中からすると窓口が一本化され、ワンステップで対応してもらえるメリットがある。伐採、製材、乾

燥、在庫などの見通しも立てやすくなる。

工房側としても量がある程度まとまれば意見が通りやすくなるし、ノウハウや技術を共有することもできる。人工乾燥を施した材料を共同購入という形でまとめて買い入れるといった活動も実施している。今年4月には上越市で県産広葉樹を使った家具などを展示するイベントを開催した。

当面の目標として、2030年くらいには、新潟県内で僕らみたいな業者が素材を選ぶ際には、スノーピーチを含む県産広葉樹が当たり前の選択肢になればいいと思っている。

そのためにまずはメンバーを増やしたい。もっと買いやすい仕組みをつくったり、デジタルデータによる共通の在庫システムのようなものも導入できないだろうか、いろいろ考えている。

■ヨキカグ・繁田浩嗣氏

自然に感謝して良い家具をつくる

「ヨキカグ」は4年前にスタートしたプロジェクトで、静岡の広葉樹を活かして家具作りを行っている。

きこりが木を伐る斧は「ヨキ」と呼ばれる。この呼び方には自然に感謝して木を伐らせてもらうという意味が込められている。自分たちも自然への感謝と敬意をもって家具をつくりたいという思いを込め、「斧から始まる家具作り」としてプロジェクトを「ヨキカグ」と名付けた。語呂的に「良い家具」という意味もある。

メンバーは約10名で、自分、そして家具屋4名のほかに広葉樹の専門製材、針葉樹の専門製材、デザイナー、プロデューサー、研究者が加わっている。

山の意識改革で利用量を増やしたい

静岡県は広葉樹の生産量がものすごく少ない。製材用素材としての生産量は2018年以降、

統計上は0 m³になっている。60年前の1970年代には年間40万m³も生産されていたのに、奥山や原生林から盛んに生産して伐り尽くしてしまった。

現在の生産量は5,000m³くらいだと思われるが、ほぼすべてがチップ生産に回されている。あるいは山に伐り捨てられているものも多い。街中で伐られる木もチップ行きだ。

ただ、林業をやっている立場としては、少なくとも10%くらいは製材して使えるのではないかと思う。そのことを伐採に携わる者や山主が理解して、これは使えるんじゃないかと扱いを変えれば、利用量が倍増していくはずだ。

超多品種の特徴を活かすものづくりを

プロジェクトがスタートして4年が経った。自社の木材生産現場や特殊伐採の現場のほかに、林業研究会に所属する林業家の所有林、常緑広葉樹が多い伊豆など県東部の森林、静岡市の街路樹利用プロジェクト、静岡大学の演習林などとのつながりができた。

静岡県は富士山や南アルプスという高山があり、駿河湾という日本一深い海もあって気候が多様で、実は樹種も豊富だ。もしかすると日本一たくさんの樹種があるかもしれない。そのかわり量はないので、少量超多品種が静岡の特徴だ。その活かし方を考えたい。例えば、静大演習林の多様な樹種からツールをつくる取り組みなどが実現している。「ヨキカグ市場」というLINEグループをつくって伐採者と家具職人を繋ぎ、未利用広葉樹のマッチングを図る取り組みも始めている。

ヨキカグでは、既存の市場や製材所が扱わないようなものを草の根活動として使っていきたい。この取り組みが盛り上がれば、そういう木とともに良質材も出てくるだろうから、結果的に静岡全体がよくなる。そんなふうにはバランスを取りながらいろんな課題を織り込んでいけば、活動もやりやすいただろうと考えている。